

『就実教育実践研究』第11巻 抜刷
就実教育実践研究センター 2018年3月31日 発行

体験活動により向上する学級社会関係資本 — 小学校修学旅行の充実の背景と効果の検証 —

The Social-capital among remote palace schools.

門原眞佐子・舞田大貴・高木 亮

体験活動により向上する学級社会関係資本

— 小学校修学旅行の充実の背景と効果の検証 —

門原眞佐子 (初等教育学科), 舞田大貴 (初等教育学科4年生), 高木亮 (初等教育学科)

The Social-capital among remote palace schools.

Masako KADOHARA (Department of Elementary Education)

Daiki MAITA (Department of Elementary Education (Student))

Ryou TAKAGI (Department of Elementary Education)

要旨

本研究は小学校の体験活動が充実する背景として、学級風土・社会関係資本と、体験活動の楽しさ・充実の効果を検討することを目的とする。学級風土・社会関係資本として〈学級内信頼〉と〈自己開示〉, 〈他者理解〉に関する3因子合計22項目に加えて修学旅行に関する“楽しみ”と“充実”について尋ねる質問紙調査をA小学校の協力で6年生86名の修学旅行の前後に実施した。同一人物間の“紐づけ”がなされた縦断的データが確保しえたため, “楽しみ”と“充実”の“事後変数—事前変数”により算出した“楽しみ”と“充実”に関する変化量の合成変数を変数として投入している。その結果, 修学旅行以前の学級風土・社会関係資本により修学旅行の“楽しみ”と“充実”の期待が高まること。ついで, その変化量が修学旅行後の学級風土・社会関係資本を高める効果が確認された。

キーワード：小学校, 学級風土, 社会関係資本, 特別活動, 修学旅行

1. 問題と目的

(1) 本調査研究の目的

平成29年3月31日に改訂された『小学校学習指導要領』や『幼稚園教育要領』(以下, 『学習指導要領』等)では, いわゆる学力の三要素を地域社会の中で育む「社会に開かれた教育課程」という考え方が示された。また, 現行『学習指導要領』等では教育課程経営と表現された課題を「カリキュラムマネジメント」と普及しやすい表現に改め, “アクティブラーニング”と強調された教育方法論の展開を学校園の現場の今までの教育実践との連続性を踏まえ「主体的・対話的で, 深い学び」と表現している。また, 学校間の接続の課題を重視し, そのスタートとしての幼小接続において「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」及び「アプローチカリキュラム」と小学校1年次の「スタートカリキュラム」を提案, その文脈の中で幼小ともに共有できる教育活動として体験活動も注目されている。こ

のような現代的課題の中で本調査研究は体験活動の中で修学旅行に着目し、体験活動の教育活動としての教育効果を高める背景要因とともに、活動後の影響について検討を行うこととした。特に、背景で変数であり事後に影響を与える変数として、小学生の教育活動であり学校での充実の成否に大きな影響を与えるとされる学級風土に着目する。学級風土については“介入操作可能性”に関する議論があまり存在せず、近年になって数量尺度に基づいた“コンサルティング”の議論が始まっている段階である（例えば、伊藤・宇佐美, 2017）。他方、学際的な研究領域として社会関係資本に関する議論は学級風土と大きく重なる“信頼感”や“互恵性”, “連帯感”といった対人関係の心理的要素が健康や安全, 教育効果, 経済効果, 幸福感などに大きく貢献することを示している。特に、社会関係資本はその構築・介入のための方法論が近年注目されつつある⁽¹⁾。そこで、本調査研究では学級風土を社会関係資本の一種として注目し総合考察を行う。

(2) 体験活動に関する先行研究

文献検索サイト『CiNii』によれば“体験活動”や“特別活動”, “総合的な学習の時間”をめぐる教育課程の視点に基づいた文献研究（例えば、鬼頭, 2007; 安原, 2008など）や歴史的経緯に関する議論（例えば、保田, 2016）, 実践報告（例えば、金谷・梶井, 2013; 井上・松下, 2015）は多い⁽²⁾。また、数量的な調査研究の報告も多い（例えば、岡山県総合教育センター, 2007; 樽木, 2013; 河本, 2014; 松岡・蜂谷, 2016）。しかしながら、修学旅行などを包括する特別活動における遠足・集団宿泊的の行事に関する研究はあまりなく、数十年前に学会発表要旨等が散見される（例えば、渡邊, 1969; 中島, 1995）程度である。他は、佐伯による一連の研究（佐伯ら, 2007; 佐伯ら, 2008）しか確認できない。

さて、本調査の設計を行う上で量的先行研究について把握していきたい。体験活動に関する調査研究を蓄積しまとめた樽木（2013）は主に中学・高校における体験活動の生徒による回想を通じた心理的影響過程を検討している。例えば、文化祭や小集団活動等において教師の様々な支援を背景変数とし、体験活動を通していわゆるレジリエンスや自己効力感、自尊感情などが高まることを明らかにしている。河本（2014）は大学生対象に中学・高校での体験活動の回想的意味付けを調査し、〈集団への肯定的感情〉と〈他者意識の高まり〉, 〈集団活動に対する消耗感〉, 〈問題解決への積極性〉, 〈他者統率への熟達〉, 〈学校行事へのさらなる傾倒〉の6因子が存在すること、その背景に〈ストレス経験〉と〈問題志向的行動〉, 〈集団の親密性〉が影響力を持つことを明らかにしている。また、第一・第三執筆者也参加した岡山県教育センター（2007）は中学生と小学校高学年児童と中学生生徒からなる不登校による適応指導教室通所者を対象に様々な体験活動の事後評価として〈楽しさ〉と〈充実感〉を測定している。これらがそれぞれ引きこもり傾向や攻撃性など不登校につながる心理・情緒を改善することと、体験活動ごとに〈楽しさ〉と〈充実感〉にウエイトを異にしながら影響を与えることを明らかにしている。また、佐伯ら（2007）は宿泊的の行事として修学旅行に注目し、この結果の教育効果として後述する学級風土に関

わる〈学級内信頼感〉と〈自己信頼感〉、〈他者理解〉の3因子が形成されることを明らかにした。その上で、佐伯ら(2008)では修学旅行における体験の内実として〈自然の美しさを感じた体験〉と〈自己を開示し、他者とうまくかかわった体験〉、〈班活動に協力し、円滑に活動した体験〉、〈困難なことに挑戦し達成した体験〉の4因子を置き、これらが前掲の教育効果としての学級風土を向上させる特性となることを確認している。

以上を概観するかぎり、本研究が目的とする小学生を対象とした修学旅行に関する調査研究はあまり先行研究がなく探索的性質を持たざるをえないことを踏まえながら調査研究の設計を行うこととした。その中で、小学校高学年でも回答しやすい簡単な測定として修学旅行への「楽しさ」と「充実」をそれぞれ一項目で測定することと、修学旅行事前と事後の縦断的測定を同一人物の紐づけを行ったうえで検討することとした。

(3) 学級風土に関する先行研究と学級社会関係資本

風土とはいわゆる“雰囲気”や“温かさ・冷たさ”などの“空気”とよばれるものであり、学級における望ましい風土として支持的風土をはじめとした議論は戦前からなされている⁽³⁾。伊藤(1999)や伊藤・松井(2001)は「学級風土質問紙」を作成し、近年その精度を高める改訂版を開発している(伊藤・宇佐美, 2017)。20年をかけたその一連の研究では〈学級活動への関与〉と〈生徒間の親しさ〉、〈学級内の不和〉、〈学級への満足感〉、〈自然な自己開示〉、〈学習への志向性〉、〈規律正しさ〉、〈リーダー〉(旧版では〈学級内の公平さ〉)の8因子52項目からなる。これらは、自己表現や情緒の安定性、学習意欲、規律、人間関係ならびに行事の楽しさなどの教育活動全般の前向きさと相関を持つことを明かにしている。この他にも観察などの第三者評価を通じて学級風土の測定を行う研究(岸ら, 2010)や大学生の回想を通していじめ被害・加害体験、自尊感情と学級風土の関連の研究(吉川ら, 2013)、学級風土の中で教師の影響に関する研究(西田・田嶋, 2000)が存在する。

これらの中に描かれる学級風土に関する内容は学級内の対人関係評価や自身と周囲との信頼関係、対人関係と教育活動等への積極性、相互の協力的な態度・行動、心理的一体感、規範などからなり、おおむね佐伯ら(2007; 2008)での教育効果としての学級風土はこの一部を測定したものであるといえる。また、これら学級風土の内容が前掲の社会関係資本の一部分として捉えなおしを行うことに大きな違和感はないものといえる。

2. 方法と分析

(1) 質問紙の構成

佐伯ら(2007; 2008)の「学級内信頼感」因子に係る14項目、「自己開示し、他人とうまく関わる」因子に係る5項目、「他者理解」因子に係る3項目に、「楽しみ」(実施前においては「修学旅行を楽しみにしている」、実施後においては「修学旅行が楽しかった」)と「充実感」(実施前には「修学旅行でしてみたいことがある」、実施後には「修学旅行が充実していた」)の2項目を加え、計24項目で構成した。

(2) 調査の実施概要

事前・事後調査は、修学旅行の1週間前後で実施した。

なお、調査対象のA小学校の修学旅行は平成29年5月25日から1泊2日で北部九州方面での旅行として実施された。

回答者数（有効回答率）：86名（6年生在籍者のうち 87.8%）である。

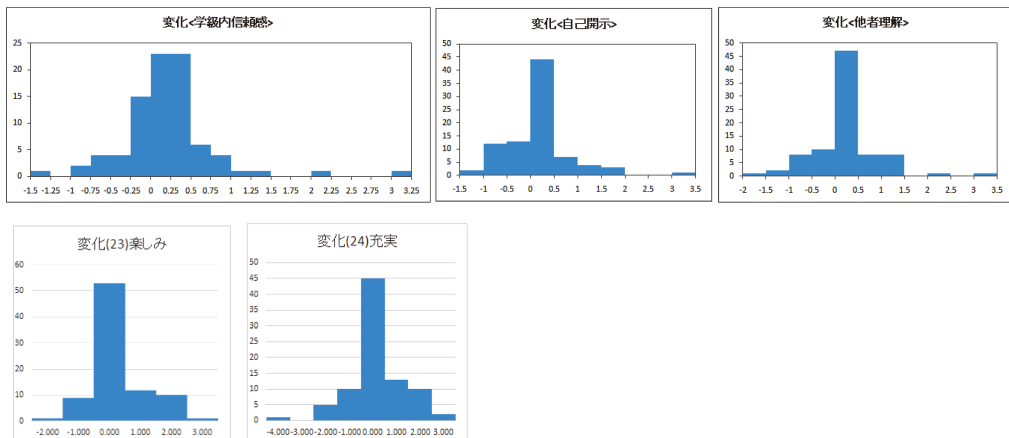
(3) 回答の概要と変数の処理

回答者数の確保状況から因子分析の実施も不可能ではないが引用元との因子の齟齬が出ることによる議論の難しさなどを考え、引用元である佐伯ら（2007, 2008）に準拠した因子構造を前提とし表のような因子とその平均値を代表値とした。なお、ロジスティック回帰分析でのみオッズ比よりの期待値を算出をしゃすくする意図で因子の合計得点を変数として投入している。

また、項目(23)“楽しみ”と項目(24)“充実感”は各回答者ごとに事後調査の項目から事前調査の項目を指し引くことで変化量に関わる合成変数を算出した。これにより同一人物間の縦断的データにおいて合成変数の数字が正の数字であれば事前の“楽しさ”や“充実”の期待を超えた修学旅行の“楽しさ”と“充実感”が得られたことになり、負の数字であれば“楽しさ”と“充実感”が事前の期待を超えなかった“期待外れとなった”こととなる。

	因子
①この学級の中で私は安心してすごすことができると思う。	I<学級内信頼>
②この学級の人は話しやすい。	I<学級内信頼>
③この学級の人は仲が良いと思う。	I<学級内信頼>
④今後、私はこの学級の人と楽しく活動できると思う。	I<学級内信頼>
⑤この学級の人と気軽(きがる)に話することができる。	I<学級内信頼>
⑥この学級の人と活動するのは楽しいと感じる。	I<学級内信頼>
⑦この学級の人は人を大切にしていると思う。	I<学級内信頼>
⑧この学級の人は困っている人がいたら助けようとすると思う。	I<学級内信頼>
⑨この学級の人は私に親切(しんせつ)にしてくれている。	I<学級内信頼>
⑩私は、この学級の人を信じている。	I<学級内信頼>
⑪この学級の人には正直(しょうじき)にかかり合っていると思う。	I<学級内信頼>
⑫この学級の中に仲の良い友達がいる。	I<学級内信頼>
⑬私は、この学級の人と正直(しょうじき)にかかり合っていると思う。	I<学級内信頼>
⑭私は、この学級内に信じるのできる人がいる。	I<学級内信頼>
⑮誰(だれ)かがいつも話を聞いてくれる。	II<自己開示>
⑯人に自分の気持ちを伝えることができる。	II<自己開示>
⑰自分が思っていることを人に伝えることができる。	II<自己開示>
⑱自分の気持ちを素直(すなお)に表現することができる。	II<自己開示>
⑲誰(だれ)かに分からないことをどうしたら良いのか聞くことができる。	II<自己開示>
⑳私は他の人の気持ちがわかると思う。	III<他者理解>
㉑私は、この学級の人の良い部分が見える。	III<他者理解>
㉒私は、この学級の人を考えていることが分かる。	III<他者理解>
前㉓修学旅行が楽しめた。 前㉔修学旅行が楽しかった	楽しさ
前㉕修学旅行でやってみたいことがある。 後㉖修学旅行をやり遂げた。	充実

3つの因子の平均値と合成変数項目23および項目24の度数分布を以下に示す。



次に、学級風土・社会関係資本に関わる3因子と項目(23)、(24)の修学旅行前、修学旅行後さらに合成変数“修学旅行後-修学旅行前”の相関一覧表を以下に示す。

	前<学級内	前<自己開	前<他者理	前<楽しみ	前<やっ	後<学級内	後<自己開	後<他者理	後<楽しみ	後<やっ	変<学級内	変<自己	変<他者	変(23)	変(24)
前<学級内信頼感>	1.0000	0.7199	0.7603	0.5746	0.4753	0.6115	0.5154	0.4560	0.5091	0.5499	-0.4680	-0.2578	-0.4367	-0.2553	-0.0148
前<自己開示>	0.7199	1.0000	0.7103	0.3543	0.5206	0.5871	0.6173	0.3885	0.3974	0.3072	-0.1730	-0.4688	-0.4489	-0.0903	-0.2356
前<他者理解>	0.7603	0.7103	1.0000	0.3284	0.3204	0.5822	0.5238	0.6325	0.3613	0.4568	-0.2247	-0.2372	-0.5388	-0.0894	0.0540
前<楽しみ>	0.5746	0.3543	0.3284	1.0000	0.5907	0.2291	0.1708	0.0746	0.5295	0.4354	-0.4055	-0.2198	-0.3218	-0.7311	-0.2027
前<やっ>	0.4753	0.5206	0.3204	0.5907	1.0000	0.3366	0.2979	0.0965	0.3025	0.2618	-0.1711	-0.2705	-0.2881	-0.4402	-0.6966
後<学級内信頼感>	0.6115	0.5871	0.5822	0.2291	0.3366	1.0000	0.8498	0.6684	0.4873	0.5816	0.4131	0.2721	0.0127	0.1269	0.1323
後<自己開示>	0.5154	0.6173	0.5238	0.1708	0.2979	0.8498	1.0000	0.5979	0.4903	0.5523	0.3560	0.4056	0.0077	0.1967	0.1452
後<他者理解>	0.4560	0.3885	0.6325	0.0965	0.0965	0.6684	0.5979	1.0000	0.2518	0.5104	0.2217	0.2200	0.3117	0.1162	0.2934
後<楽しみ>	0.5091	0.3974	0.3613	0.5295	0.3025	0.4873	0.4903	0.2518	1.0000	0.7483	-0.0416	0.0888	-0.1694	0.1916	0.2867
後<やっ>	0.5499	0.3072	0.4568	0.4354	0.2618	0.5816	0.5523	0.5104	0.7483	1.0000	0.0166	0.2632	-0.0052	0.0981	0.5101
変<学級内信頼感>	-0.4680	-0.1730	-0.2247	-0.4055	-0.1711	0.4131	0.3560	0.2217	-0.0416	0.0166	1.0000	0.6006	0.5168	0.4356	0.1648
変<自己開示>	-0.2578	-0.4688	-0.2372	-0.2198	-0.2705	0.2721	0.4056	0.2200	-0.0888	0.2632	0.6006	1.0000	0.5302	0.3257	0.4367
変<他者理解>	-0.4367	-0.4489	-0.5388	-0.3218	-0.2881	0.0127	0.0077	0.3117	-0.1694	-0.0052	0.5168	0.5302	1.0000	0.2360	0.2529
変(23)	-0.2553	-0.0903	-0.0894	-0.7311	-0.4402	0.1269	0.1967	0.1162	0.1916	0.0981	0.4356	0.3257	0.2360	1.0000	0.4652
変(24)	-0.0148	-0.2356	0.0540	-0.2027	-0.6966	0.1323	0.1452	0.2934	0.2867	0.5101	0.1648	0.4367	0.2529	0.4652	1.0000

(4) 分析Ⅰ. 事前の修学旅行に関する“楽しみ”と“してみたいこと(充実期待)”の背景

	事前<楽しみ>				事前<してみたいこと>			
	β値	有意確率	トレランス	VIF	β値	有意確率	トレランス	VIF
事前<学級内信頼>	1.20	0.00 ***	0.36	2.80	0.54	0.02 *	0.36	2.80
事前<自己開示>	-0.05	0.76	0.42	2.39	0.61	0.00 **	0.42	2.39
事前<他者理解>	-0.29	0.10	0.37	2.73	-0.33	0.07	0.37	2.73
修正R2乗値	0.34				0.30			
F値(判定)	15.3***				12.9***			

注)有意確率については、p<0.05で*、p<0.01で**、p<0.001で***を記載する。

分析としてまず修学旅行前の項目(23)“楽しみ”と項目(24)“してみたいこと”を目的変数とし、修学旅行前の学級風土・社会関係資本3因子を説明変数とした重回帰分析を行った。トレランスおよびVIF値より無理のないモデルであることが確認できる。結果としては、修学旅行前の項目(23)“楽しみ”については〈学級内信頼〉が有意に正の影響を与えており、項目(24)“してみたいこと”については〈学級内信頼〉と〈自己開示〉が有意な正の影響を与えていた。つまり、〈他者理解〉以外の学級風土・社会関係資本は修学旅行への期待感を高め、R²値にみるようにある程度大きな説明力を有することが分かる。

(5) 分析Ⅱ. 修学旅行後の学級風土・社会関係資本の背景分析

次に、修学旅行後の学級風土・社会関係資本の3因子を目的変数とし、修学旅行前の学級風土・社会関係資本の3因子と合成変数(23)と(24)の5変数を説明変数とした重回帰分析を行った。これにより、修学旅行後の学級風土・社会関係資本がどのように育まれたかが分析できる。結果を以下の表に示す。下記の表のトレランスとVIF値を見れば分かるようにモデルは無理なく成立していることが理解できる。

	事後<学級内信頼>				事後<自己開示>				事後<他者理解>			
	β値	有意確率	トレランス	VIF	β値	有意確率	トレランス	VIF	β値	有意確率	トレランス	VIF
事前<学級内信頼>	0.38	0.01 **	0.30	3.33	0.18	0.28	0.30	3.33	-0.01	0.97	0.30	3.33
事前<自己開示>	0.23	0.06	0.32	3.16	0.53	0.00 ***	0.32	3.16	0.01	0.94	0.32	3.16
事前<他者理解>	0.08	0.44	0.34	2.90	0.02	0.87	0.34	2.90	0.55	0.00 ***	0.34	2.90
変<楽しみ>	0.16	0.03 *	0.63	1.58	0.18	0.04 *	0.63	1.58	0.05	0.54	0.63	1.58
変<充実>	0.05	0.35	0.59	1.70	0.12	0.09	0.59	1.70	0.15	0.03 *	0.59	1.70
修正R2乗値	0.47				0.47				0.4378			
F値(判定)	16.1**				15.9**				14.2**			

注)有意確率については、p<0.05で*、p<0.01で**、p<0.001で***を記載する。

修学旅行後の〈学級内信頼〉は修学旅行前の〈学級内信頼〉と合成変数(23)“修学旅行の楽しさ”により有意に高まっていることがわかる。また、修学旅行後の〈自己開示〉は修学旅行前の〈自己開示〉と合成変数(23)“修学旅行の楽しさ”により有意に高まり、修学旅行後の〈他者理解〉は修学旅行前の〈他者理解〉と合成変数(24)“修学旅行の充実”により有意に高まっていることが分かる。つまり、学級風土は修学旅行前の同一因子からのみ影響をうけつつ、修学旅行の事前期待が裏切られなかった楽しさにより〈学級内信頼〉と〈自己開示〉が増し、事前期待が裏切られなかった充実感は〈他者理解〉の態度を向上させていることがわかる。

(6) 分析Ⅲ. 修学旅行の“期待以上”と“期待はずれ”はどのように構成されるか

次に、合成変数(23)と(24)が「0」でなかった者について検討を行いたい。つまり、修学旅行について合成変数が正の数字であった“期待以上”と合成変数が負の数字であった“期待外れ”群の児童のそれぞれの背景である。楽しさ(項目(23))と充実(項目(24))を1項目で測る性質上、大きくズレが生じることは考えにくく、正の数字となった場合は“改善はしているが事前の期待が低すぎた”(期待以上群)ともいえる。また、負の数字となった場合は“期待していたけど期待外れであった”(期待外れ群)ともいえる。合成変数(23)は53名が合成変数(24)は45名が「0」であり、多くの児童は修学旅行は“期待通りの楽しさであり充実度であった”と答えたこととなる。ここから外れる“期待以上”群と“期待外れ”群をそれぞれダミー変数として「1」と変換し、それ以外の者を「0」と変換した上でロジスティック回帰分析の検討を行った。

まず、合成変数(23)の“期待以上の者(23+)”と“期待はずれの者(23-)”のロジスティック回帰分析を確認する。

項目 23+

変数 (ポイント幅)	オッズ比	オッズ比98%信頼区間		p値
		下限	上限	
<学級内信頼>(14~70)	1.157	1.039	1.289	0.01**
<自己開示>(5~25)	0.912	0.734	1.132	0.41
<他者理解>(3~15)	0.840	0.599	1.178	0.131

項目 23-

変数 (ポイント幅)	オッズ比	オッズ比98%信頼区間		p値
		下限	上限	
<学級内信頼>(14~70)	1.015	0.909	1.133	0.79
<自己開示>(5~25)	1.011	0.792	1.291	0.93
<他者理解>(3~15)	1.033	0.676	1.578	0.88

合成変数(23)つまり、“楽しさが期待以上”であった者が上記上であり、“楽しさが期待外れ”であった者が上記下である。上の表を見て分かるように、修学旅行の楽しさが期待以上であった者は〈学級内信頼感〉がオッズ比1以上で有意であることが分かる。つまり、もともと修学旅行や宿泊研修に抵抗があるなど「楽しみ」を期待しにくい児童であっても〈学級内信頼〉が高ければ参加後に“期待以上であった”とプラスの感想を持ちやすくなる。

また、上記の下の表を見て分かるように“楽しさが期待はずれ”だった者を説明する有意な独立変数は確認できなかった。学級風土・社会関係資本では説明できず、何か他の原因が“期待はずれな楽しさ”の原因になっているといえる。

オッズ比のポイント数ごとの乗数が“当該ダミー変数（ここでは“期待以上の楽しさ”）となる期待値”を指す。〈学級内信頼〉は14項目で構成されるため、仮に各項目1ポイント高い〈学級内信頼〉合計での14ポイントの高くなったとした場合は1.157の14乗つまり約7.703倍の期待値で“事前に楽しさを期待できなくても、後から楽しかった”と感じる状況が期待できる。つまり宿泊研修などを楽しみにできない児童に〈学級内信頼〉のある学級は大きな支える力を持つといえる。

次に合成変数(24)がプラスであった者つまり“期待以上に充実していた者”とマイナスであった者つまり“充実が期待はずれであった者”を「1」としたダミー変数を目的変数に投入したロジスティック回帰分析を行った。前者を以下の上後に後者を以下の下に表記する。

項目 24+

変数 (ポイント幅)	オッズ比	オッズ比98%信頼区間		p値
		下限	上限	
〈学級内信頼〉(14~70)	1.052	0.963	1.149	0.26
〈自己開示〉(5~25)	1.153	0.954	1.393	0.14
〈他者理解〉(3~15)	0.773	0.558	1.072	0.13

項目 24-

変数 (ポイント幅)	オッズ比	オッズ比98%信頼区間		p値
		下限	上限	
〈学級内信頼〉(14~70)	1.035	0.934	1.147	0.51
〈自己開示〉(5~25)	0.748	0.585	0.956	0.02*
〈他者理解〉(3~15)	1.559	1.067	2.278	0.02*

上の表上で分かるように“修学旅行が期待より充実していた者”については学級風土・社会関係資本では有意な説明ができなかった。受け身的な性質もある“楽しさ”と異なり能動性が求められる“充実”は学級風土・社会関係資本だけでは調整しきれず、その他の支援要因の探索が必要であるといえる。

一方で、上表の下で分かるように“修学旅行の充実が期待はずれであった者”については〈自己開示〉がオッズ比0.748であった。つまり、望ましくない“充実の期待外れ”を〈自己開示〉は抑制する期待値を持つ。〈自己開示〉は5項目から構成されるため、仮に各項目1ポイント増の因子合計で5ポイントの〈自己開示〉の高さは0.748の5乗つまり0.2342となる。つまり“充実が期待外れ”というネガティブな状況を〈自己開示〉は4分の1以下の期待値でリスク抑制をすることが理解できる。想定外であった点は〈他者理解〉のオッズ比1.559であったことである。つまり、“〈他者理解〉というポジティブな学級風土・社会関係資本の高まりが修学旅行の充実の「期待はずれ感」を高めるリスク”があることを示している。〈他者理解〉は3項目から構成されるため各項目1ポイント増での因子合計3ポイントの増加で1.559の3乗つまり3.789倍のリスクを高める怖れを持つこととなる。

これは他者に対する洞察や共感，気づきなどをもつ繊細さは気を使って修学旅行等で周囲に合わせすぎてしまう傾向を示唆しているのかもしれない。

3. 総合考察

(1) 学級経営による修学旅行への期待

本調査研究では修学旅行以前の学級風土・社会関係資本が修学旅行の事前の“楽しみ”と“充実”に関する期待を左右することを確認した。ここで測定した学級風土・社会関係資本において〈学級内信頼〉は修学旅行事前の“楽しみ”も“充実期待”も向上させ、〈自己開示〉は“充実期待”を向上させる一方で、〈他者理解〉はいずれも規定していなかった。岡山県総合教育センター（2007）は参加するだけで楽しい体験活動として例えばレクリエーションや遠足が“楽しみ”つまり受け身のポジティブ感情を主に高め、参加に努力や困難克服が求められる合唱祭や職場体験活動が“充実感”つまり能動的なポジティブ感情を主に高めることを報告している。小学生においても修学旅行における“楽しみ”という比較的能動的な期待は容易に形成されやすい一方で、“充実”の期待は能動性であったり主体性、計画性であったり周囲との対話・調整などの能動性を要するなどの形成の難しさがあるのかもしれない。

〈学級内信頼〉は個人の外的環境であり社会心理学的風土の課題といえる。一方で〈自己開示〉と〈他者理解〉はいずれもソーシャルスキルであるが、前者は自分から他者や環境への働きかけであり、後者は他者や環境を認知し理解しようという技術であるといえる。アサーショントレーニングで向上するともいわれる自己を周囲に表現する姿勢である〈自己開示〉は修学旅行の事前期待に影響力を持った。逆に他者を理解し慮る態度・心理は期待を高める効果が確認できなかっただけでなく、修学旅行充実の“期待はずれ”感のリスクになりえた。「ネガティブな結果」といえなくもないが質問紙に限らず長い人生で、そのような思慮と期待を我してでも自分の感情を抱くことは、重要な社会的スキルであるのは間違いないといえよう。『学習指導要領』等で「主体的・対話的で深い学び」がアクティブラーニングに基づく要素として提示され、近年は心理学でもアサーションなどの自己表現やソーシャルサポート等を受け入れ支援を求める態度などが重視されている。一方で、逆の自分が他者を理解することの効果や意義、難しさについてはあまり議論がなされていない。〈他者理解〉の意義は今後、検討の必要性を示すものであるといえよう。

(2) 修学旅行は学級風土・社会関係資本を変える

修学旅行後の学級風土・社会関係資本は3因子とも修学旅行以前の学級風土・社会関係資本の同一因子からのみ影響を受ける。また、〈学級内信頼〉と〈自己開示〉は合成変数(23)つまり“楽しさ”の変化量により向上し、〈他者理解〉は合成変数(24)つまり“充実感”の変化量により向上することが明らかになった。このことは、期待を裏切らない修学旅行の成功がその後の学級風土・社会関係資本を高めることを意味する。逆に子供の立場から“期

待に添わない”修学旅行の内実になってしまえば学級風土・社会関係資本が悪化することを示唆している点を押さえておきたい。前後で確認された修学旅行の期待にあわせた楽しさ（合成変数(23)）は学級内の雰囲気をよくし、アサーティブな雰囲気を形作り。一方で、修学旅行の期待にあわせた充実状況（合成変数(24)）は他者理解という自らの態度・行動を周囲にあわせようという姿勢を育むといえる。今回は小学生実施を踏まえ極力少ない項目数での仮説設計を行ったが、今後は修学旅行の〈楽しさ〉と〈充実〉や学級風土・社会関係資本の因子をより多角的に検討する意義が感じられる。

ところで修学旅行自体の楽しさと充実に関わる工夫は教育課程経営上の工夫の様々な余地があり、本調査研究はその内実について細かく訪ねているわけではない。どのような活動内容が受動的という意味で児童みんなが容易に前向きになる“楽しさ”を確保し、どのような活動上の工夫が積極的・能動的で一定の苦勞の克服を要する“充実”を確保するかについては今後の検討の余地があるといえる。例えば、今後のカリキュラムマネジメントのPDCAにおける改善を目指して、教育課程の評価を行う際に、修学旅行をはじめとした体験活動の“楽しさ”と“充実感”をそれぞれ児童生徒対象に調査を行うことで、どのような活動が楽しさと充実感のそれぞれを高め、その教育効果が具体的にどのような児童生徒の発達をもたらすのかを議論する機会になるといえよう。

(3) 体験活動における事前の期待と事後振り返りの関係性

本研究は縦断的データの分析を行う上で、修学旅行実施後の変数から修学旅行実施前の変数の差し引きを行い、変化量を合成変数として算出する手法での分析を行った。そのため、楽しさや充実感の変化量の算出から“期待と現実に合わせた修学旅行の振り返り”を独立変数とした重回帰分析の算出や、期待と現実に齟齬のあった者をダミー変数化して目的変数に投入したロジスティック回帰分析を行い“修学旅行が期待以上であった者”や“修学旅行を期待外れと感じた者”の分析を行った。合成変数自体がおおむね正規分布に近い得点分布を示しており分析自体に大きな問題はないものと判断している。しかしながら、相関表に見えるように変化量を算出した各合成変数は修学旅行実施後の学級風土・社会関係資本3因子や項目(23)、(24)と負の相関を示している。これは、合成変数算出のために修学旅行実施後の各変数をマイナスとして計算を行ったためであり、このことは合成変数と修学旅行後の各変数を同時に分析の対象とすることができないことを意味している。これらは分析上おおきな障害のある分析方法を採用したといわざるを得ない。近年ではロジスティック回帰分析を応用したパネルデータ分析などの教育統計研究も登場しており、今後はより複雑な分析の検討が課題になるといえる。

しかし、同時にこのことは事前の期待と事後の現実を考えた際に事前の期待が過剰なほど高まってしまった場合、結局のところ幻滅が生じてしまうという人間の心理の原理的な部分にも触れているように思われる。例えば有名なプロスペクト理論は事前の期待と事後の現実が一致した状態から、予想以上の期待の軸に変数が増えることと、予想よりも期待

が裏切られる軸へ変数が増えることが対数関数的に満足と不満を規定することを指摘している。つまり、人間の期待と現実のズレにより人生は満足と不満があふれているが、満足にも不満にも天井と底といえる閾値が存在することとなる。満足を最大化する理想は若干期待を上回る現実を感じられるような適度の期待と現実の工夫を考えることである。学校のカリキュラムマネジメントであり担任の学級経営はこの、“若干、子供の期待を上回る教育活動の楽しさと充実を確保する”ことであるとともに、“現実的でない期待を抱かせないこと”にも配慮する必要があるといえるのかもしれない。

そのような中で、今回示された修学旅行事前の期待を学級風土・社会関係資本が規定する結果を持ったことは有意義であるとはいえ、体験活動をめぐり子供たちの期待やそれに付随するであろう努力などが往々にして現実でフォローしきれない際の工夫も考慮していく必要がある。また、小学生が中学生になったのちは部活動の試合や高校入試など“期待して努力したものの思うに任せない結果”に直面する場面も増えてくる。一見、今回で論じた“期待外れ”はさも“排除すべきネガティブな状況”のように感じかねないが、発達に応じた無理のない期待外れも含めた不適応に耐えられるレジリエンスなどの育成の模索とともに、これらを調整する学級風土・社会関係資本の育み方を模索していくことが小中接続・連携の課題にもなるといえよう。

【注釈】

(1) ソーシャルキャピタルの訳後である社会関係資本についてはロバート・パットナムの『孤独なボーリング—警告コミュニティの崩壊と再生—』（原本 2000 年刊）や『われらの子ども—米国における機会格差の拡大—』（原本 2016 年刊、副題は“The American Dream Crisis”）で世界的に学際研究が注目されている。本邦では理論自体の汎用性とともコミュニティの維持・発展ならびに経済における特に格差問題への効果を指摘する稲葉（2011）『ソーシャルキャピタル入門—孤立から絆へ—』とともに、教育においては露口（2016）『ソーシャルキャピタルと教育—「つながり」づくりにおける学校の役割—』が詳しい。おおむね、上記書籍の副題を一瞥するだけでその問題意識と関心が理解できよう。

(2) 体験活動に関する先行研究については丁寧な展望論文として河本（2012）が存在するため、これを参照されたい。

(3) 本調査研究は小学生を対象とするため、伊藤・宇佐美（2017）などの先端で詳細な学級風土尺度を採用しなかった。しかしながら、近年は学級風土研究において特別支援的課題のある児童生徒（矢野、2008）や乳幼児の保育場面（岸ら、2017）でも学級風土の良さが教育効果や発達・適応支援に効果を有することが明らかにされつつある。アンケート調査等の測定は困難ではあるが、コミュニケーションすら未成熟な子供にも有益である点が学級風土に着目する魅力である。

【引用文献】

- 伊藤亜矢子 1999 「学級風土質問紙作成の試み—学級風土を捉える尺度の帰納的な抽出—」『コミュニティ心理学研究』 2-2,pp.104-118.
- 伊藤亜矢子・松井仁 2001 「学級風土質問紙の作成」『教育心理学研究』 49-4,pp.449-457.
- 伊藤亜矢子・宇佐美慧 2017 「新版中学生用学級風土尺度（Classroom Climate Inventory : CCI）の作成」『教育心理学研究』 65(1),pp.91-105.
- 稲葉陽二 2011 『ソーシャルキャピタル—孤立から絆へ—』中公新書
- 井上真由子・松下一世 2015 「中学校における人間関係づくりプログラムの研究開発—特別活動の授業とかけ橋支援の一体化—」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』 20-1,pp.1-24.
- 金谷行恵・梶井芳明 2013 「社会的な資質を育む特別活動の在り方に関する研究—異学年交流における小学6年生の活動に注目して—」『東京学芸大学紀要総合教育科学系』 64(1),pp.139-151.
- 岸正寿・戸田大樹・荒木由紀子 2017 「保育内容『人間関係』の指導法に関する一考察—幼児期の人間関係の形成に着目した事例の検討を通して—」『教育学論集』 69,pp.109-127.
- 岸俊行・澤邊潤・大久保智生・野嶋栄一郎 2010 「学生・教師を対象とした異なる学級雰囲気への検討—授業雰囲気尺度の作成と授業雰囲気の第三者評定の試み—」『日本教育工学会論文誌』 34-1,pp.45-54.
- 鬼頭明成 2007 「学習指導要領にみる特別活動の位置づけと学校教育の課題」『立正大学心理学研究所紀要』 5,pp.33-49.
- 河本愛子 2012 「日本の学校行事に関する学校心理学的展望」『東京大学大学院教育学研究科紀要』 52,pp.375-383.
- 河本愛子 2014 「中学・高校における学校行事体験の発達の意義—大学生の回顧的意味づけに注目して—」『発達心理学研究』 25-4,pp.453-465.
- 松岡敬興・蜂谷昌之 2016 「特別活動におけるいじめ未然防止プログラムの開発研究—学級活動で育む人間関係の構築—」山口大学教育学部編『研究論叢第三部』 66,pp.269-280.
- 西田純子・田嶋誠一 2000 「中学校の『学級風土』に関する基礎的研究—「教師項目」を含む尺度作成の試み—」『九州大学心理学研究』 1,pp.183-194.
- 中島明男 1995 「旅行・集団宿泊の行事の教育効果について」『日本教育心理学会総会発表論文集』 37,p.542.
- 中井大介・庄司一子 2008 「中学生の教師に対する信頼感と学校適応感との関連」『発達心理学研究』 19-1,pp.57-68.
- 岡山県総合教育センター2007
- Patnam,R.D. 2000 "Bowling Alone. : The Collapse and Revaival of American Comunity".

- (邦訳 2006年『孤独なボーリング—米国コミュニティの崩壊と再生—』 柏書房)
- Patnam,R.D.2016"Our Kids. : The American Dream Crisis." (邦訳 2017年『われらの子ども—米国における機会格差の拡大—』 創元社)
- 佐伯英人・石原貴志・二橋正宏・高柳周三・宮本真由美・斎藤央美 2007「集団宿泊の行事の教育効果に関する研究 (I)」山口大学教育学部編『研究論叢, 芸術・体育・教育・心理』 57,pp.75-83.
- 佐伯英人・石原貴志・二橋正宏・高柳周三・宮本真由美・斎藤央美 2008「集団宿泊の行事の教育効果に関する研究 (II)」『国立青少年教育振興機構研究紀要』 8,pp.25-35.
- 樽木安夫 2013『学校行事の学校心理学』 ナカニシヤ出版
- 露口健司編著 2016『ソーシャルキャピタルと教育—「つながり」づくりにおける学校の役割—』 ミネルヴァ書房
- 渡邊英一 1969「学校教育における修学旅行の意義」『日本教育心理学会総会発表論文集』 11,pp.330-331.
- 保田直美 2016「小学校の学級活動で用いられる技術の変遷—学校は心理学的な技術をどのように受容するか—」『佛教大学教育学部紀要』 15,pp37-55.
- 吉川延代・今野義孝・会沢信彦 2013「いじめの被害・加害体験と自尊感情の関係—大学生を対象にした遡及的調査研究—」『人間科学研究』 34,pp.169-182.
- 安原実 2008「学校行事と学年・学級経営—主体的な学びを引き出す特別活動—」『国際基督教大学大学報 (1-A,教育報告)』 50,pp.97-102
- 矢野正 2008「特別活動と学級活動の持つ特別支援教育への可能性—支持的風土のある学級による取組を目指して—」『日本特別活動学会紀要』 16,pp.65-71.

【付記1】

本研究は第二執筆者の課題意識および経験を基に構成を展開し論文を作成した。一方で第一執筆者は先行研究の整理に基づいて論文全体の展開において補足を行っている。第三執筆者は分析と表記の整理に責任を負っている。

【付記2】

本研究は科学研究費補助金 (基盤研究 (B)26285177)「教育政策がソーシャル・キャピタルに及ぼす影響に関する調査研究」(研究代表者, 露口健司, 愛媛大学)の助成を受けている。